

園がX氏の関心をひいたことも一度もなかった。あまりにも平凡すぎて、特徴というものが一切ない、どこにでもある空地風の公園だった。闇の力が膨らんでいる。

草の、風に吹きあげられる気配だけが漂っていて、他にはなにもない。いや、時空の密度が、ある一点でぐんぐんあがっている。足は、もう歩きたい、1歩を踏みだしたいと運動へと傾いているのだが、身体の自由が利かず、眼は、ある奇妙な力に吸い寄せられて、一点から動かず、ただ、棒のように垂直に立ち尽くしていた。力のうねりは規則的な周波となってX氏の頭を刺激している。あぶない、あぶないぞとX氏は頭の奥で叫んだ。

不意に時空が熱くなった。一瞬、身体が、自分の身体から横に数センチずれたような気がした。来た。突風のようなものが吹いた。耳のなかで爆発音が響いた。痙攣の波が全身をかけぬけ、身体がふわりと宙に浮き、手足の感覚が消えてしまった。

光が走った。

前も後も、上も下も、右も左も消えてしまって、あらゆる方向へと同時に垂直に飛翔する運動が生じた。どこか、途轍もない、遠い、遠いところへ一瞬のうちに移動しているのだが、また、そこはもっとも近いところでもあるという奇妙な感覚がX氏を襲った。X氏の顔は、まっ青になり、白紙以上の白さで輝やき、大きな痙攣の渦にまきこまれてしまった。草の葉が、1つが2つになり、2つが4つになり、倍々ゲームでおそろしい勢いで分裂して増え続けている光景が眼に映った。眼

は、分裂するスピードについていけないのに、確実に、倍々が増えている草の姿は頭が捉えているのだった。草のまわりには、無数の光の独楽が廻っていた。光は、泡のように顕現しては、輝やきの頂点に達すると、揺れながらどこへともなく消えていくのだった。X氏は自分の眼がその光景に対してもちこたえているのが不思議で仕方なかった。意識が眼だった。時空に無数の深淵があって、光滴が集まって、光の束となり、穴に吸い込まれていった。光の独楽はとびっきりの美だった。千年でも億年でも、ただ凝っと眺めていたかった。光こそが最高の謎だった。おそらく、光は、たったひとつの永遠を知っている。煌々と輝やく光の渦は、X氏の全身を犯した。

耳の奥で、2度目の爆発音がひびいた。

夜の鳥が鋭い声で啼いた。

X氏は、右の頬に冷たい液体が流れているのを感じた。光が消えた。雨傘が傾いて、右半身が濡れている。雨傘の重みが左手にもどった。ずいぶん長い間、雨のなかに立ち尽くしていたような気がする。1日、いや、1年。実際、発作に似たそれは数秒で終わった。耳鳴りがした。頭を左右に振ってみた。光の織物を視た記憶は生き生きとしている。しかし、何が、どのように、どこで起こったのか、何もわからない。幻覚でもない。X氏は、10歳も老けたような気がした。疲労が全身に貼りついている。

静かだった。空地に近い公園には、草の、風に吹かれる気配だけがある。いつもの、どこにでも